国展 90th anniversary 芸術の秋
工芸沖縄展

工芸の粋 凝縮

巨匠21人 名品を特別展示

国内最大級の公募展「国展」の90周年の節目を記念し、「90回記念国展工芸沖縄展―黎明から現代 匠の系譜」（主催・国画会工芸部、沖縄タイムス社）が13日から10月2日まで県立博物館・美術館の美術館企画展示室で開かれる。（1面参照）

「用と美」を追求する近代日本の工芸界で活躍した濱田庄司や芹沢銈介、棟方志功ら巨匠21人の名品68点の特別展示が目玉だ。先人たちの思いを受け継ぐ現在の会員や準会員らの作品139点も展示され、計207点におよぶ工芸の粋が並ぶ。沖縄開催は初めて。

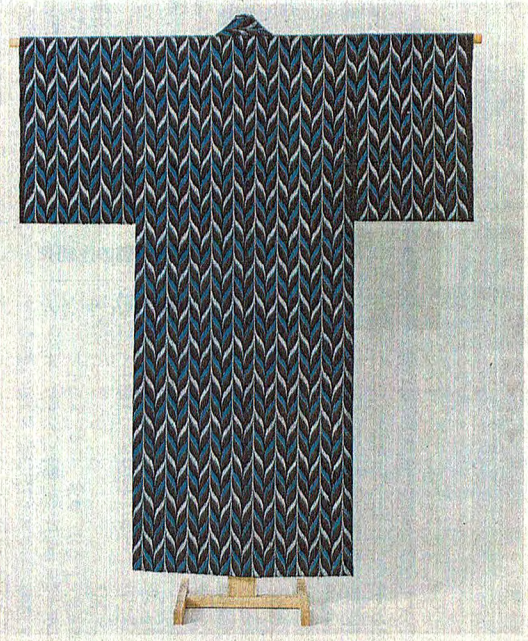
特別展示では金城次郎や新垣栄三郎らの作品も里帰りし、小橋川永昌とともに「壺屋三人男」の作品が勢ぞろいする。沖縄の国展会員8人は全員沖展会員でもあり、国展と沖展の関係は深い。

国展は毎年4～5月に東京で開催し、名古屋や大阪、福岡を巡回する。工芸展の地方開催は80周年で濱田庄司が拠点とした益子（栃木県）の2006年に次いで2度目。

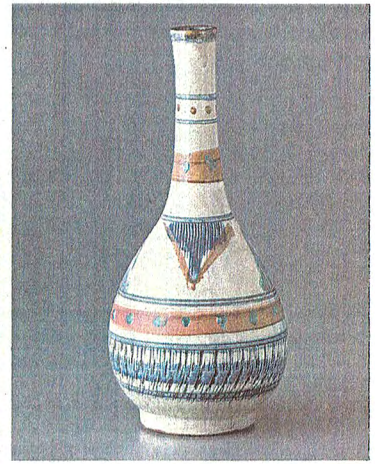
国展は1926年、国画会の前身にあたる「国画創作協会」が梅原龍三郎らを招いて展覧会を開催した。工芸部は翌27年、富本憲吉がつくり、28年に国画会と名称を変えた。工芸部は1度解散するが、民芸運動を指導した柳宗悦や濱田、芹沢、柳悦孝らが47年に新しく設置し直して、現在の工芸部の礎を築いた。

入場料は一般1200円、小・中・高生500円。9月25日は午後2時から同館講堂でシンポジウム「国画会工芸と沖縄」が開かれる。シンポは無料。

初の沖縄開催 きょう開幕 県立博物館・美術館


柳悦孝「柳絣着物」（個人蔵）


金城次郎「海老彫文大皿」
（濱田庄司記念益子参考館）


新垣栄三郎「呉須赤絵彫文瓶」
（濱田庄司記念益子参考館）



創造性と実用性追求

ルバース・ミヤヒラ吟子さん（織）

国展90年の歴史で周年事業として、海を越えて沖縄に初めてやってくる。携わることができて、感無量だ。

女子美術大学で染織を学んで織の道に入り、卒業制作の年の1973年、初めて国展に出品、入選したことが思い出深い。母の宮平初子は会員で親子そろって作品が陳列された。恩師の柳悦孝さん、柚木沙弥郎さんが会員だったので、学生同士連れだってよく見に行っていた。

次第に国展の重要性が分かってくる。沖縄の工芸は琉球独特の文化で、当時東京にいて、高い評価を得ていると感じていた。国展を通して、濱田庄司さんや多くの作家に出会い、全国の作家から創作的な作品を追求する姿勢に多くを学ばされた。

沖縄の工芸は長い伝統に培われた技法がある。沖展の作品で織について言えば産地ごとにある技法の範囲内で表現していくことが多い。しかし、国展はタペストリーがあるなど、伝統も踏まえながら創作性を重視している。展示空間も照明や壁面、備品を含めて圧倒的な質の高さがある。

国展初の沖縄開催で足を運んで頂ければ作品の多様性を感じ取ることができる。斬新な発想でありながら実用的で工芸の本質に沿った作品が多い。巨匠の作品も展示される。大いに楽しんでほしい。